

められん事を恐れ、辭表を懷にして岩崎邸に到り、涙ながらに其失策を謝し、且つ速に解雇あらん事を請ひたるに、岩崎氏は平氣に盃をふくみながら、之を聞きて微笑しつゝ、ナニ海運の事を營業とするからは、船の沈没することあるは覺悟の前なり、決して謝するに及ばず、併ながら唯だ平生毎日、船員が用ゆる所の筆紙墨等の事に注意し、成るべく他人の物と思ふて、ムダ遣ひをせぬやう、能く／＼船員に諭しおき呉れよ、凡そ何事に限らず、多人數を使用する營業には日常の失費ほど巨額に上るものはあらじと、船長大に感激し終に其懷中の辭表を出すに及ばずして、唯々どして退けり

西征錄 (其二)

四月十五日廣島にて 田中塵外

西征の目的は今、言ふを須たざらん。其の經過觀察の事情を詳録して、教徒諸君の一樂に供するは隨行者たる予が一責務なり。只た、内地の事は故らに予が拙筆を勞するを要せざるべければ則ち其經過の大要を記して通信の責を塞がんのみ。讀者幸に一篇の隨行私記として之を見よ。不日清韓の地に入らば彼地の風物巨細さなく之を錄舉して雜遊の實務を全ふせん。

漁笛一聲

予が海外に渡航するは實に今回を以て始めと爲す、而かも今回の渡航は尋常漫遊の儔ひにあらず。今こそ我が皇が恩惠深き休戦中なる、場合に依つては又もや砲煙彈雨、天地を掩ふの修羅場と爲るべき所へ赴くことなれば、留送の別辭に前夜の半ばを費やし、旅裝の仕殘しに殆んど其夜を徹し、坐睡半刻、驚き覺むれば早や三月三十日の東天紅を潮しぬ。急餐粗服、新調の合切袴と袋入の日本刀を双肩に吊せは、雄心勃勃、意氣自から揚る。門に倚て送る家人の喃喃たる別序未だ盡きざるに、一行の車は早くも駛せ出して新橋に向ふ、晴昔の陰雨は名殘なく晴れて曙光耀々春風穆々輕く面を拂ふ。其の停車場に着するや、送行の諸士先つ在り。遠慮なき漁笛は一聲高く拍手の聲を遞きりて黒烟長く品海に流る。

駿、遠、參、

瀛車の旅行、此頃は妙らしくもなく、景勝を序するも事古りたり。特に征心矢の如く、夢魂切に清韓の野を繞るの身、争でか心こゝにあらむ。大磯の波、函嶺の陰、サテハ芙蓉の皚雪何れも見るともなく見過して、午下二時といふ頃には、ハヤ江尻に着す。車を下りて

草ヶ谷横澤等出迎えの諸氏と共に教長大石氏の家に到り、續々たる社員の來訪に應接して時を移し十時寢に就く。明くれば卅一日の朝、馬車を僦ふて静岡市法月氏に至る。氏は嘗て雞林八道を漫遊せしの人。其地理人情を説くこと頗る審かなり。氏は云ふ、夏期に追へば再び韓山に遊ぶの計畫中なりと。午後五時同氏を辭し涼車に搭して藤枝分局に到る、時正に午後八時。シカモ社員來訪するもの少なからず、廣瀬令行翁亦た來る、此夜休戦の雷報を載せたる號外を見る。坐る聖恩の優渥なるに感し、相語りて蕭然襟を正しぬ。翌四月第一日、教長櫻井翁早く來り、有志の企望を以て今夕別離の小宴を張らんと思へば是非に臨席するべしとて既に準備にかゝりたるを告ぐ。乃ち刻を期して行き臨む。會するもの數十名、益觴一巡、伊東禎三氏起て壯快なる送辭を述べ、予は之に次きて先づ其好意を謝し且つ述ふるに此行の目的を以てし了れば管長は徐かに起ちて簡單なる挨拶を爲し、夫より清酌快談時の移るを覺えさりき。陶然一睡して起ては四月二日なり、乃ち結束して藤枝を發し多數の社員に送られて停車場に到れば發車未だし、待つこと一時餘、漸くにして搭乘し、中泉驛に到れば柴田教長以下有志數十名拍手して

之れを迎ふ、導かれて某樓に小憩す。蓋し二時を過ぎて來るべき新橋一番の西行列車を待たんが爲めなり。杯盤出て酒三行す。須臾にして發車の時迫る、萬歳の聲に送られて又も西を指す、見渡す畑つらの黃花綠麥、桃櫻の紅白と相映して春色殊に佳なり。車は天龍矢矧の川、今切れ濱名の海を過來りて、遠望近景兩つながら征客の顔を照らして氣も亦快し。其の豊橋に着するや神戸教長を始め社員十數氏に迎へられ、車を連ねて教長の家に臻る。浴し了りて晚餐を喫する中來訪者頻々たり。想ひ起す、去歲本月、予管長と共に此地を巡教す、第三師團の分營十八聯隊付下士篠津氏は熱心なる我教の信徒なり其隊長佐藤大佐に説き、大佐亦た悦んで之を請し、乃ち其兵營に於て管長の講演を聽くことゝ爲りぬ。管長は先づ天祖國を舉め給ひしことより説き起し、帝國臣民か國を愛するは直ちに君に忠なるの所以を論し延きて日本臣民は先天的に忠勇義烈なる事を述べ引證舉例身を軍籍に置けるものゝ服膺せざる可からざる事に至つて大佐太く感激したることありき。曷んぞ圖らむ、春去り夏來りて蜂賊亂を貧弱の國に起し轉して頑大國の暴戾となり、更に轉して宣戰の大詔煥發するや、大佐隊を率ゐて發し篠津氏亦た軍

に随つて進み、向ふ所前なく、驕名を東亞に轟かし光譽を烈日と争ふに至らんとは。聞く、大佐今は北清の野に在りて寒凍の苦を凌ぎ頃日終に毒彈の傷くる所となれりと。予等今、幸に彼地に入らんとす、露營の中幕床の下、相對するの時、感愴果して什麼、篠津氏の如きは夫れ或は狂喜せん乎。神戸氏始めは隨行の覺悟なりしも事故の許さるものありて其の意ならず、曰く、必らず後殿たらんと。一坐之を領す。一睡夢破れて起ては三日午前第六時、倉皇行李を載して腕車を停車場に馳せ、新橋發夜行列車に乘して西伏見に向ふ。

伏見

此日風雨濛々として天地昏く十尺の外、復た物を見ず。折角の琵琶の眺めも僅かに模糊の間に認めしのみ。定刻より遅るゝと二時餘にして車は稻荷停車場に着す。小憩數分、雨稍霽る、乃ち人車を僦ひ堀内村九谷氏に着せしは早や黃昏の頃なりき。九谷氏は今堀内村々長にして能く公共の事に従ひ、四面佛徒の中に包まれて篤く我教を信す。公務之餘、牧畜の業に熱心し、牛豚雞豹を飼養し、就中搾乳の法宜しきを得、其の京に在るもの、販路を壓して近郷第一と稱す。又た、昨年、堀内村の御料地となりて宮内省に買上げらるゝや、氏

は東都に馳せて其筋に運動し、細民を拯ふに努めたる結果、維持費として宮内省より金千七百圓の特別下附ありたりといふ。今回渡清の擧の如き、氏は第一に贊成の書を送り、行途是非に一泊を乞ふとの懇篤なる書翰を寄せられたり。寒喧の辭畢るや、氏は熱心に平素見聞せる佛徒の運動性行等を述べて盛んに今回の行を賛せり、蓋し其の肺肝より出づるもの。別後幾星霜、舊を語り新を談して盡きす。氏は双清と號し、俳諧を能くす、故中井櫻洲山人と雅交あり。此夜雨歇むて雲斷續。

黃檗山

四日宿雨晴れ來りて朝曦赫奕、遠山の曉霞、靄々として春色地に滿つ。先づ東天を拜して、皇運の隆昌を祈り、征清軍の健在を禱る。十時、九谷氏に導かれて宇治の黃檗山を見る。「山門を出れば日本の茶摘歌」之れ加賀の千代か當山を歌へるの句、明末の一僧隱元和尙の創立に係る。門を入れば元と一物の日本風なるものなかりしの古刹、今は却つて甚た俗了せり。前管長嘗て當山に遊び、今の管長亦た隨つて爰に一春秋を送りしことありしかや、實に三十年前の佳事なり。入りて迂回すれば本堂あり、壯嚴巍峨、知客寮に行きて訪

へは役僧あり、出て、應接し、當山管長病氣の故を以て禮を欠くを謝す。我か管長携ふる處の扇面に自咏の國風を寫して之れを贈り、嘗て觀し大雅の畫、子昂の書を再び看んとを求め、案内に連れ、別院に到りて見る。大雅堂畫く所の五百羅漢、筵箇々活躍し趙子昂書する所の七律字々生氣あり。少焉して進藤端堂氏出て應接す、氏は如今、當山より發行せる『禪宗』の主筆にして嘗て東都にあり前管長の知る所、屢々本館をも訪へりいふ、予も刺を通して清談數刻の後、氏に導かれて當山の寶物を覽る。開祖隱元を始め即非、木庵、獨立等の諸師、子昂、其昌、探幽、常信、尙信、大雅堂等の書畫及び御親筆等尠ならず、開祖の所持品等珍器寶物亦た幾百點、一々役僧の説明を聽き、去つて別院に憩ふ。此日、大施餓鬼あり、本堂は午後より勤行あり「フチャ」の響應を爲すべければとて留めらるゝがまゝ留まりしも、何の沙汰なく待クタバヒしを以て竟に辭して歸る、此夜丸谷氏療に腦む、紀伊郡長來訪し、管長と面話、暫時にして歸る。

大阪

五日晴天、丸谷氏頻りに西京に一日の滞在を勧めしも歸朝の折を期して辭し十時車を僦ひ佳吉に出で淀河瀛

船に搭して直ちに大阪に向ふ。所謂疇昔の三十石、水垣々として船太た静、午後三時大阪に着し、直ちに南區鍛冶屋町萱葦氏に到る。予幼にして生國を出で、此地に在る事三年、シカも是れ實に二十年前の往事に屬す。左れば、此地に於ての經歷、今は夢の如く幻のごとく一として記憶に留まるものなし。従つて今昔の感起ること深からず、茫として未見未知の境に入りしが如し。此日大阪毎日新聞社に知友を訪ふ、在らず。夜心齋橋通りより道頓堀を散步す、來往織るか如く車馬絡繹たり。歩いて有名なる千日前に至れば雜踏殊に甚たしく辛ふして竄れ歸る。

山陽鐵道

曉を覺えさる春眼覺め來れば四月の第六日の東天又た麗かなり。午前八時、萱葦氏に送られて梅田停車場に至り瀛車に搭す。神戸にて山陽鐵道に乗り換へ西に駛すれば名にし負ふ須磨も明石も舞子の濱も刹那に過ぎて通ふ千鳥の淡路島目にもとまらず、思へば瀛車の旅ほどあッけなきものはなし。姫路を経て四五の村落を過ぎり、岡山に着せしは午後五時頃なりき。翌七日又た瀛車に搭して廣島に入る。